

アメリカ相互関税問題におけるタイの動向 2025 年 11 月

先月 10 月にタイ、米国両国が合意した相互貿易協定の枠組みにおいて、タイは米国からの輸入品（工業製品・農産物など）に対する非関税障壁を大幅に撤廃し、米製品の受け入れ拡大を約束しつつ、非関税障壁の緩和を協力して進めることで合意しました。しかしながら、その後の交渉は順調ではなく、今月中旬、米国側がタイとの関税交渉を一時停止するという報道がありました。背景には、同時期のタイ・カンボジア国境情勢および和平協定問題が影響しているとの見方があり、この混乱で、当初期待されていた「関税免除リスト拡大」や「米国市場へのアクセス拡大」の見通しに不透明感が生じています。

「タイ化学業界の現在地と将来展望・前編『タイ化学産業の現在地』」

今回から数回にわたりタイの科学業界についてレポート致します。タイの化学産業は、ASEAN の中でも「ちょうど良いバランス」を持つのが特徴です。というのも、タイは自動車・電機・食品加工・包装など、生活に直接つながる産業が国内に集まっています。これらの産業は多くの「材料」を必要とするため、化学産業にとって安定した需要源になります。こうした背景から、タイの化学産業は、単に大量に作れば良いという『量の競争』ではなく、「用途に合わせて作る、使う側に近い化学品」が育ちやすい土壌を持っていると言えます。

その特徴を理解しやすくするために、化学産業を「上流」「中流」「下流」という三つの段階で説明致します。

「上流」とは、原油やガスを加熱・分解して、エチレンやプロピレンなどの一番基本になる材料を作る段階の事を指します。これには巨大な工場設備が必要で、国全体としての設備競争になります。中国やサウジアラビアのような資源国はここが非常に強いという状況です。タイにも上流の大きな工場はありますが、中国に比べれば規模は小さめで、『世界の供給を左右するほどではない』というのが実情です。

「中流」とは、上流で作られる基本材料を使って、使いやすい形に整える段階と定義されます。例えば、自動車のバンパーを作るための樹脂ペレット、スマホの筐体を作るための材料、塗料や接着剤の基になる成分などがここに含まれます。上流ほどの巨大設備は要りませんが、一定の設備投資と技術が必要でかつ幅広い産業に使われるため、規模が大きな市場になりやすい領域です。タイはこの領域に適度な投資をしてきたため、中流の材料を国内で作り、周辺国にも輸出できるだけの力があります。

「下流」とは、中流の材料をさらに細かく調整し、実際に「モノづくりの現場でそのまま使える状

態」にする段階です。例えば、ある自動車メーカー専用の樹脂配合、食品包装のための特別なフィルム、多層構造のラップ材、電子機器の熱対策・絶縁材料などです。こうした材料は、使う企業の細かい仕様や性能に合わせて作る必要があるため、顧客と近い場所で、相談しながら開発できる国が有利になります。タイは製造業が国内に集まっているため、この下流領域が非常に強いと言えます。

実際、タイの化学品の輸出入を見ても、中流・下流を中心に「輸出入のバランスが綺麗にとれている」ことが分かります。上流については海外に依存しつつも、中流・下流で付加価値をつけて輸出することで、全体として安定した構造を作り上げています。ASEAN 内で見ると、シンガポールに次ぐ「安定して輸出できる国」という位置づけにもなっています。

一方で、ベトナムやインドは事情がまったく違います。両国とも製造業が急激に伸びているため、化学品の需要は爆発的に増えていますが、まだ国内で作る力が十分ではありません。そのため、化学品の輸入が増え続けています。つまり、「タイから輸出する市場が今後ますます大きくなる」という意味でもあります。

こうして見ていくと、タイの化学産業は、「上流で勝つ」のではなく、「中流と下流で加工の強みを活かして勝つ」という、ASEAN の中でも独自のポジションにいたることが分かります。そしてその強みは、今後 10 年でさらに重要になると考えられます。これから進出する企業も、まずこの構造を理解することが戦略構築の要（かなめ）と言えます。次回はタイ化学産業の将来展望についてレポート致します。



↑11 月 19 日より 4 日間、タイ最大の製造業展示会である「METALEX2025」が開催されました。人数の最終公表はまだですが、昨年よりも人通りは多い印象かつ、昨年話題になった中国企業の大規模展示が減少し、日本企業が相対的に目立つようになっていました。